

## 【講演会報告】

# 国内外の多様な教育 ～デモクラシーの根っこをはぐくむ学びのかたち～

井谷 信彦\*  
ITANI, Nobuhiko

2018年11月15日（木曜）16時半より、武庫川女子大学学校教育館 SE-312 にて、武田緑氏（Demo 主宰）の講演会が開催された。

武田氏は、自身が立ち上げた一般社団法人コアプラスの代表理事を昨年辞任、現在は個人事務所 Demo の主宰として、「民主的な教育を日本中に広げる」ことを目標に活動されている。



このたびの講演会では、国内外のさまざまな教育施設の視察経験をもつ武田氏に、特色のある施設の授業風景や教育理念をご紹介いただきながら、日本の教育の進むべき方向をご提案いただいた。

時間割の半分を体験学習が占めるきのくに子どもの村学園、通知表を出さない長野県伊那市立伊那小学校、テストの点数による評価をおこなわない自由の森学園、対話による合意形成に重きをおく箕面こどもの森学園、固定されたカリキュラムをもたないサドベリーバレースクール、イエナプランの理念を取り入れたオランダの学校など——これらの豊かな事例は、従来の教師中心の教育観・授業観に問いを投げかけ、子どもたちが学びの主役になれる教室とはいかなるものかを、我々の目に見えるかたちで示してくれた。



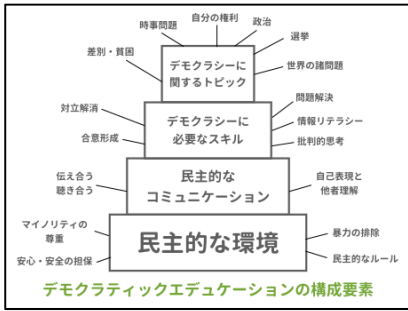
さらに武田氏は、こうした教育施設の視察をとおして

浮かびあがってきた、いわゆる「オルタナティブ教育」に共通の6つの特徴をご提示くださった。①将来のために現在を犠牲にするのではなく、現在と将来の両方が幸せであることが大事にされる点。②他者の意見に耳を傾けるだけでなく、まずは自分の意見をもつことが大事にされる点。③他者と対話をしながら他者との関係のなかで学ぶことが重視される点。④一人ひとり異なる特性に配慮をした環境を整えることが重視される点。⑤社会との繋がりを持ち「ホンモノ」から学ぶことが大切にされている点。最後に、⑥子どもたちが大人の決定や指示に従うだけでなく、自分たちの学習環境や生活環境を自分たちで作っていくことができる点。以上のような洞察にもとづいて武田氏は、「民主的な教育」の実現と拡大に向けた、種々の取り組みを進められている。

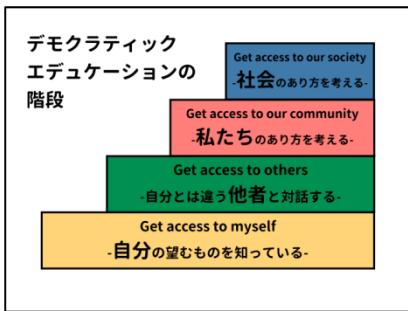


このとき特に大事にされているのは、民主的な環境のもとで、民主的な社会をつくる力を育む、ということである。差別・貧困や政治問題など、現実社会の諸問題を話題として学ぶことも、たしかに重要である。だがそのためにはまず、暴力による問題解決が排除されており、マイノリティが尊重されているなど、「民主的な環境」が整っていることが前提になる。こうした環境があって初めて、自分のことを表現することや、他者の言葉に耳を傾けることのできる、「民主的なコミュニケーション」の場が開かれることになる。このような基盤の上に立つことで我々は、合意形成、対立解消、問題解決のために求められる、「デモクラシーに必要なスキル」を養っていくことができるだろう。「民主的な教育」を実現するためには、こうした土台から構築していくことが重要ではないか、と武田氏は話された。

\* 武庫川女子大学（Mukogawa Women's University）



しかしながら、現在の日本において「民主的な教育」を実現・拡大していくためには、障壁となる問題が多く存在している。なかでも、武田氏が特に深刻な問題と捉えておられるのは、自分の意見をもつことができない、自分の望みがわからない若者を生み出している、日本の教育環境である。幼いころから「自分で決める」機会を満足に与えられずに、代わりに多くの命令や禁止を与えられて、「みんなと一緒に」であることを求められて育ってきたのが、現代の若者たちではないか。まずは我々一人ひとりが「自分の望むものを」知ることが重要であり、他者との対話や、私たち（集団）の在りかた、社会の在りかたをめぐる思索は、このうえに初めて成り立つのではないかというのである。



講演後の質疑応答においては、聴講者のうち3名から、いずれも重要な問いが提示された。

第一に、町づくりの活動などにさいして、日本国外にルーツをもつ子どもたちなど支援を必要とする人々が、支援者らの「支援しようとする」態度に覚える違和感や怒りに、いかに向き合うべきかという問い。

これについて武田氏は、支援が求められる状況があることを認めながらも、支援者が陥りがちな傲慢さや、被支援者への憐憫などの感情が、自分にないかチェックを怠らないことが重要であるとされた。

第二に、「父親がいない」という家庭事情をもつ自分や友人を、特別に憐れむべき対象として扱おうとする別の友人に、「恩着せがましい」扱いを止めてもらうにはどうすればよいかという問題。

武田氏はこれを難問であるとしながら、当事者から伝えることは困難なので、第三者から諫めてもらうのが良いのでは、と助言を贈られた。

第三に、武田氏が学生時代に「CORE+」を立ち上げ活動していくにあたり、協力者・賛同者となる人々とは、どのようにして出会ったのかという質問。

これにたいして武田氏は、さまざまな人との出会いには SNS が役に立ったと話された。また、自分が興味を抱いたイベントなどには、積極的に足を運んでみることも、有効ではないかと助言された。



第四に、先に提示された「民主的な教育」の理念には多くの人が賛同するであろうが、にもかかわらず実現に至っていない原因は何だろうかという問い。

これにたいして武田氏は、教師のあいだの同調圧力、批判を怖れてのことなかれ主義、ゆっくり対話をする暇もない多忙さ、「みんなにおなじ扱いを」という素朴な平等の観念などを、原因として挙げられた。

「民主的な教育」の実現をめざすうえで忘れてはならないのは、教師自身が、学びの、仕事の、人生の主役になれる環境こそが、児童生徒が学びの主役になれる教室づくりを支えるということだろう。教師中心か児童中心か、支援者中心か被支援者中心か、こうした二項対立を丁寧に解きほぐしていった先にこそ、「民主的な教育」の実現への道が拓かれてくるように思う。

最後に、お忙しいなか講師を務めてくださった武田緑氏と、熱心に聴講くださった二十余名の皆さまに、厚く感謝を申しあげて、本稿の結びに代えたい。